

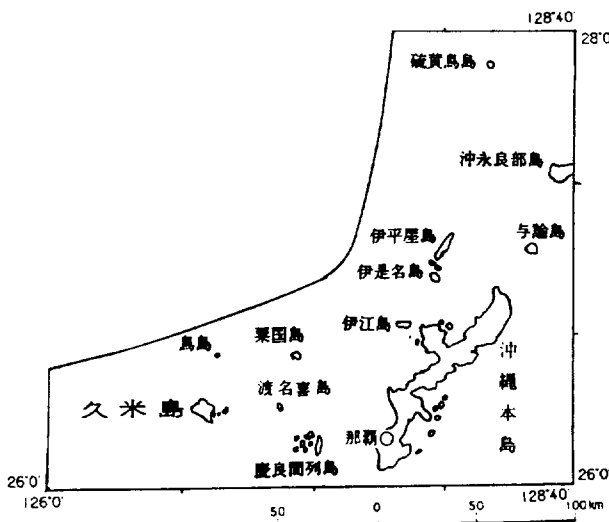
# 久米島の海岸・海中地名

나카무라 마사나오(仲村 昌尙)\*

## 1. 自然と位置

地図①に示す通り、久米島は沖縄本島の西方約90kmにあって、周長54km、面積約58.5平方kmの島である。中新世、鮮新世に火山活動によって形成された島で、一千万年前に南部にアーラ連山が500万年前に北部の大岳連山が出来、この二つの連山の間は台地又は低地になっている。遙か海上から見ると二島に見えるが、島に接近するにつれて、中央部の台地や低地が見えて来るので、一つの島であることが分かる。

地図②でわかるように、島の東北部から北部にかけて、陸地が海岸に迫り、海岸は珊瑚石灰岩で取り囲んでいる。



〈久米島位置図〉

特に北東部は標高200mの断崖となり、晴天の場合は東北の沖縄本島がかすかに見える。西部から南部にかけて、長いリーフが発達し、内海(イノーという)と外海を隔てている。

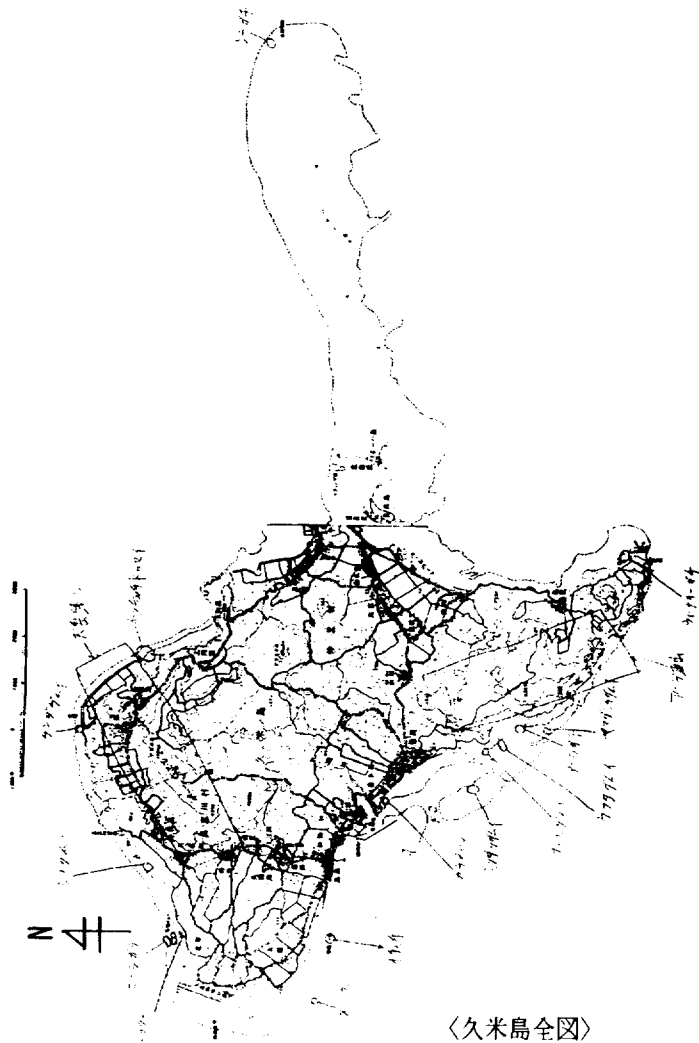
東部には直線距離にして全長11kmもの長いリーフ(幅約100~200km)が東部に伸びている。そのリーフの先端は拝岬(ウガン

\* 전 중학교 교유·지명 연구가

ザキ)と言ひ、昔の人々が東方太陽が上がる方向に向かって、島人たちの健康、作物の豊作などを神々に祈願した。この場所からリーフは Uの字形にターンして、島尻と呼ぶ集落の近くまで離礁が点在し、廣大な内海(イノー)を形成している。

## 2. 海の地名

島の西南部から南部、東部に發達した廣大な面積を占めるイノー(内海)は古代から



現在まで魚類、海草類に恵まれ、人々の生活をうるおしてきた。現在は陸地の開発が進むにつれ、赤土流出等で海の汚れが目立ち、魚、貝、海草もいちぢるしく減少し、漁夫たちは遙か遠い洋上まで出かけて漁をするようになった。内海には数多くの地名が存在するが外海にはほとんど地名は存在しない。内海(イノー)に数多くの地名が存在するのは、人々の生活とふかく結びついている証である。

A) 魚垣(イユガチ)

魚垣は久米島の方言でイユガチという。イユ(魚)カキ(垣)。カキはガチともいう。

これは漁法の一つで浅瀬に石を運び込んで石垣囲いを作り、満潮時に魚群が入りこんでくるのを待つ。干潮し始めると囲い内に入っている魚が外部に逃げるのを防ぐ、集団で石垣の周辺から追い込む。潮が干上がると魚獲する。

潮が外へ流れ出る区域には2本の竹で把手を付けた袋状の網をつくり(この道具をザディという)外部へ逃げる魚をすくいとった。

集団で保獲した魚は平等に配分した。このような魚垣は久米島周辺の海岸線によく見られたが、今日ではこの漁法は姿を消し、見ることができない。ただ、その地名だけが残っている。それらを列挙すると、「イッチャチ」(西銘縄張)、「エーラガチ」(仲地の縄張)、「カチジャマー」(嘉手苺の縄張)、「イッチャチドゥマイ」(比屋定の縄張)、シールガチ(眞謝の縄張)、「ンニガチ」(宇根の縄張)、「アーラガチ」(儀間の縄張)、「ウィナテーガチ」(島尻の縄張)。

西銘、仲地、嘉手苺、比屋定、眞謝、宇根、儀間、島尻などは海岸に近い集落名である。尚、上記地名は地図③を参照して下さい。

B) クムイ(小堀)

干潮時に水溜りが出来る池を「クムイ」という。クムイにも大・小あるが廣さや深さに関係なく「クムイ」と呼んでいる。

内海(イノー)に無数に存在するので列挙することは省くことにしますが、形状や特徴から呼称されたものを記述することにします。更に集団の縄張りであるクムイには集団名が付いているので、それらを取り上げることにします。

(ア) 形状や特徴

- ナービグムイ — 鍋の形をしている。「ナービ」は鍋のこと。

- シンリグムイ — 「シンリ」は滑る意味。氣を付けないと足を滑らす。
- シナグムイ — 「シナ」は砂のこと。湖底に白いすなが多い。
- マラグムイ — 「マラ」は男の性器。性器と似ている。
- チンダグムイ — 「チンダ」は針金のこと。細い海草が群生し、曲りくねった針金のように見える。

(イ) 集団名の付いた所

- スーニグムイ — 「スーニ」は 曾根という一族。その一族占有。
- ウフタグムイ — 「ウフタ」は大田という集団名。
- ミンダシグムイ — 「ミンダシ」は神名。この神名の付いた一族。
- ヤマグシクグムイ — 「ヤマグシク」は山域という集団名。

以上 (ア) (イ)について、他にもありますが、紙面の都合もあると思い、省くことにしました。

尙、これらの地名も地図③を参照して下さい。

「クムイ」での漁法には「チケーン」(イノーで行う)もの、「シメーシ」、「タタチャー」、「アンブシ」、「ヒータマラサー」などの漁法が行われた。今日ではこのような漁法もほとんど見られなくなった。

C) アンブシとマチェーミ

上記のアンブシ漁法を行った付近は地名として2~3ヶ所残っているが、現在では堆積土でヒ淺くなるか、陸化していて、以前の面影はない。

「マチェーミ」は網を張ることであるが、内海(イノー)と外海の境界をなすリーフの低い地点で潮潮時に他の地域より早く外海から内海へと海水が流れ込んでくる場所で、そこに網を張る。このように内海と外海を結ぶ低い地点では盛んに網漁を行ったので、地名として「マチェーミ」(網を張る)という呼び方で残っている。

D) トゥマイ(泊)・ンナトゥ(港)・クチ(口)の地名

泊と港は船の出入、碇泊した場所を指し、口は内海と外海の出入口に付けられた名称である。

泊や港は同じ意味で船が碇泊する所である。島外交通の要地としての泊・港は久

米島には二カ所ある。島の西方に兼域港、東方に眞泊港がある。現在島外交通に利用されていないが、以前は儀間港という所もあった。

ここでかかげるトゥマイ、シナトゥは島外交通に利用されている場所ではありません。

「マジャドゥマイ」(眞謝泊)という地名がありますが、ここは琉球五國時代に利用されていた港で、今日では漁港として利用され、規模が小さく、大型船が出入出来る場所ではない。

- ドウドゥマイ — 「ドウ」は堂という古い集落の名で、この集落の近くにある。
- ヒヤジョードゥマイ — 「比屋定泊」。比屋定は集落名。
- アーカドゥマイ — 「アーカ」は阿嘉という集落名。
- トゥマイ — 泊・仲泊。これは昔港があった所が陸化し、そこに集落が形成された。  
泊・仲泊は集落名。
- カンドゥマイ — 「カン」は神。神泊(カンドゥマイ)。神々へ祈願する港。

このようにして、漁のため頻繁に船が出入する場所に名付けられた地名である。泊、港地名はこれらの他にも数カ所存在するが省きます。

#### E) グーフ地名とスガマ地名

この二カ所の地名は外洋にある地名で、久米島をとりまく東中國海にはこの二カ所の地名しか見当たらない。

- グーフとは海底から突出した瘤状の地形になった所で、魚類が豊富な所をいう。
- スガマは「潮釜」で、久米島と東方渡名嘉島の間であって、深さが周辺より浅い30~80m 深さしかないので、潮流はこの海底台地に突き当たり海面は荒れ狂うので、船客は船酔いする人が多い。

以上、久米島の海の地名の数多い中から、ごく一部を取り上げましたが、地名の中には何という意味をもつのか明らかにできないのが多い。古老たちは朝鮮語、あるいは中国語ではないかともいう。それらについては濟州島での講演の時、資料を提示しましたので、ここに記載することを省きます。